

インドと中国に挟まれ、世界で唯一チベット仏教（ドク・カギユ派）を国教とする国家、ブータン。ヒマラヤの麓で豊かな自然に囲まれた国に魅せられて、僕は何度もこの地を訪れている。

大学在学中、憧れのブータンに行ってみたく、海外で自分の力を試したいという理由で青年海外協力隊に応募。希望が通り、ブータンで体育教師をすることになった。僕はブータンで3年を過ごし、彼らの文化や生き方に魅了された。

その理由は2つある。写真の被写体として素晴らしいことが楽しかったし、学ぶことが多かったからだ。帰国後の今も、僕は写真家としてブータンと関わり続けている。

今年8月、首都ティンプーにある特別児童・青少年職業訓練学校ダクツォを訪れた。ここでは、障がいのある子どもたちが日々、勉強したり、職業訓練をしていると聞いていた。早朝8時半になると約40人の生徒たちと約10人のスタッフが集まり、朝会が行われる。朝会後はそれぞれの部屋に分かれて、早速、職業訓練の作業が始まる。各作業場では、伝統的な仏画や刺しゅう、織物の制作、バスケット織り、お土産作り、箱作りなどが行われていた。この職業訓練の他に、個人管理スキル、手話、社会的行動、安全のスキル、一般教養などを学ぶ時間もあるそうだ。

仏画を描く青年に話しかけてみた。いろいろ話してみるのが、うまく伝わらない。彼はジュエスチャーで「耳が

聞こえないんだ」と教えてくれた。「これは何の絵？素敵だね！」と僕はジュエスチャーで聞いてみる。彼は嫌な顔一つせずに、彼ができる全ての方法を使って伝えてくれた。彼とのコミュニケーションは気持ちがよいものだった。ここには彼のように聴覚障がいがあったり、ダウン症の青年や子どもが多く通っている。

彼らの作品は想像以上に完成度が高い。もちろん、ばらつきやむらはあるが、それぞれの個性が出ていて、それがまた魅力的だった。

ダクツォの創業者であり、責任者であるジグミ・ワ

ンモさん（以下ジグミさん）の第一印象は、きりっとしていて芯が強い女性。意思の強さを全身から感じた。

彼女がダクツォを始めたきっかけは、病院でのボランティアで学校に行けない、就職もできない、家族にも見捨てられた障がいのある子どもたちの姿を目の当たりにしたことだったという。当時、ブータンには障

# Voice

## ブータンの 小さなブツダたち

写真家

関健作



心の赴くままに歌をうたうダウン症の少女

がいの者のための学校や施設がなく、親は仕事をすると子どもたちがどこかに行ってしまうという、柱にくくりつけたり、閉じ込めたりするのが当たり前だった。「そんな子どもたちを見て、居ても立ってもいられなくなった」と、ジグミさん。ティンプー市内にある知人宅のギャラリーで、障がいのある子どもたちのための学校を始めた。

当初は多くの人に白い目で見られ、協力も得られなかった。しかし2年後、彼女は大きな決断をする。自分の全財産を費やし、4代国王夫人が

会長を務める団体の支援を受けて、ダクツォを設立したのだ。

「ブータンでは、現世の障がいは前世の悪いカルマ（業）が原因だと信じる人がたくさんいます」とジグミさんは話す。

彼女が言うとおり、ブータンには輪廻転生の考えが根付いている。輪廻とは車輪の回転のように、生死を繰り返すこと。善い行いも悪い行いも、次の人生で返ってくると思われている。今、自分に起こっていることは自業自得だという昔ながらの宗教的な考え方が、障がい者を生き

にくくっていた。

そんな中、ダクツォの活動はブータンの社会に大きなインパクトを与えた。ダクツォの子どもたちが、外国人のお土産で次々とヒット商品を生み出した結果、今では空港や街観光地でもダクツォ直売ショップができ、多くの理解ある外国人がお土産として彼らの作った商品を大量に買って帰るようになった。

ジグミさんは話す。「彼らの作ったものが売れることで、世間の印象が変わってきたんです。障がい者にもできるのだ、と。そして、無関心だった多くの人がダクツォを支援してくれるようになった。

タン全土にはチャンスに恵まれない子どもたちがたくさんいる。全ての子どもや若者にこのサービスを提供する機会を作ることがダクツォの目標だという。

最後に僕は、ダクツォに入ったばかりの小さな子どもたちのクラスを見学させてもらった。彼らは絵の勉強をしていたのだが、そこにいたダウン症の女の子は絵を描きながら歌っていたときに歌い、話したいときに話していた。彼女はカメラを構えても警戒することなく、まっすぐな瞳でこちらに話し掛けてきた。まったく飾らない彼女と一緒にいると、僕も知らず知らずのうちに気持ちが軽くなり、「元気をもらうことができた。彼女は周りにいる人々を笑顔にしていた。

ジグミさんは子どもたちのことをこう表現した。

「彼らは小さなブツダです。彼らと接することで、心の中に慈悲が湧いてくるのです」と。



ダクツォの創業者、ジグミ・ワンモさん（右）。ブータンの人々の障がい者に対する考えを変えようとしている



仏画を描く聴覚障がい者の青年。声が聞こえなくても、気持ちを交わすことはできる

「子どもたちはダクツォが大好きです。ここではたくさんさんの友達に出会えるし、自分が必要とされていると感じられます。居場所があるんです。だから学校が終わってもなかなか帰ろうとしないんですよ。ジグミさんは笑顔で話してくれました。

2010年4月には、同国東部のタシガン県に「ダクツォ東」をオープン。さらに、2つの新施設の建設準備を進めているが、学校数はまだまだ足りない。ブー

△Profile▽  
せき・けんきく  
1983年、千葉県生まれ。順天堂大学スポーツ健康科学部を卒業後、3年間、体育教師としてブータンの小中学校で教鞭を執る。帰国後はブータン、チベット文化圏に住む人々をテーマに写真家として活動している。